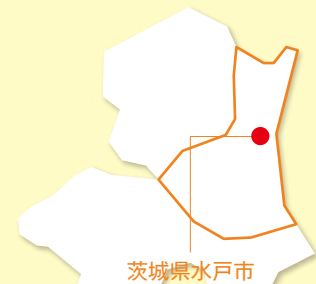


クラブ探訪 Vol.58 夢、輝け! 茨城県水戸市

水戸水球クラブ スポーツ少年団

「水中のハンドボール」「水中の格闘技」という別名もある水球。選手はずっと立ち泳ぎを続けつつボールを追う、投げるといった動作を行うため、スタミナだけでなく技術も要求されるスポーツだが、競技人口は減りつつある。そんななか「少しでも底辺を拡大したい」という代表者・吉原博孝の願いのもと、水戸市水泳協会のバックアップを受け2023年4月にスタートしたのが水戸水球クラブスポーツ少年団だ。

- 設立:2023年4月1日
- 団員数:7人(男子6人、女子1人) 指導者2人
- 活動場所・活動日:下入野健康増進センター室内プール・日曜日(16時10分~17時35分)・山新スイミングアリーナ飛び込みプール(年5回、5~6月)
- 活動費:年会費27,000円(諸経費3,000円含む)



茨城県水戸市

茨城県庁の所在地。江戸時代は御三家の一つ「水戸徳川家」の城下町として栄えた歴史を持ち、観光名所として第9代藩主徳川斉昭によって創設された日本三名園の一つ「偕楽園」や日本最大規模の藩校「弘道館」がある。市内には合計27の川が流れるなど水に恵まれており、水戸という地名も昔の言葉で水の出口を指す「みと(みなと)」に由来すると言われている。

夢中になつてボールを追いかけていると楽しくて疲れているのも忘れてしまう

水球の底辺拡大のため 2023年にスタート

「水球のおもしろさは、みんなで協力してボールをつないでシュートを打つこと。ボールや相手の動きに合わせて泳がなければならぬので、自分のペースで泳げる競泳と比べるとすごく疲れます。でも、夢中になつてボールを追いかけていると疲れているのを忘れて、気づいたら結構体力がついていたということがよくあります」と水球の



水球を好きになる子どもたちを増やすべく尽力している吉原博孝氏

魅力を語るのは水戸水球クラブスポーツ少年団副団長の吉原博孝氏。自身も小学5年生のときに水球をはじめてから中学高校大学と打ち込み、高校の教員となつた現在はこうして後進の育成に当たっている。

水戸水球クラブが発足したのは昨年の4月。現在活動している下入野健康増進センターの室内プールでは、「はじめての水球」と題したスポーツ教室を年に2期行っており(1期15回、毎期30人ほどが参加しているが、そのスポーツ教室のなかで「も」と水球をしてみたい」という子どもたちを対象にスタートした。茨城県にはかつて6つのジュニア水球チームがあったが、現在は指導者のなり手が少なくなつてきたこともあり、この水戸水球クラブと土浦

水球クラブ、そしてジョイフルアスレチッククラブの3つのみほかに茨城県立並木中等教育学校中学校。

水戸水球クラブがスタートできたのも、教員である吉原氏が土浦の高校から水戸の高校に転動になったことが大きい。吉原氏は高校で競泳部の顧問しており忙しい身ではあるが(水戸市水泳大会の役員でもある)、地元水戸市の出身で、水城高等学校水球部のOBでもあることから「水球の底辺を拡大していきたい。他の都道府県ではジュニアが徐々に育ってきているので、茨城県でも少しずつやっていきたい」という思いがあり、水戸市水泳協会の要望を受けて水戸水球クラブをスタートさせたのだ。ちなみに、吉原氏は土浦水球クラブの立ち上げにも関わっている。

にも理解してもらつていて助かります」と吉原氏。

団員数が7名と少ないためゲーム練習をするときは吉原氏も加わるが、吉原氏と同じ水城高校水球部のOBで先輩である飯田英樹氏の存在も欠かせない。また、ときには水球経験のある社会人の方がサポートして入ってくれることも。吉原氏は「まだ始まって1年ぐらいいないので、みんな水球の動きが分かっていません。このまま続けていき今中学1年生の子が3年生になるころには、上級生が下級生に教えるといういい流れがでると思います」と今後さらに団員が増えることを期待している。

12.5mシュートは練習の成果

実際に練習を見ると、ロングシュート練習では25mプールの中央から投げたボールが次々とゴールに吸い込まれていく。12.5mを投げていることになるが「最初はこの半分でも届きませんでした」という。「最近の子どもたちは陸上でもボール投げをほとんどしないので、プールのなかからではほんとうにボールを投げられなせうでした。でも続けているうちに少しずつうまく投げられるようになり、距離も伸びてきました。練習の成果です。そうしてシュートができるようになると、試合でもゴールが決まることも。そのときの子どもたちの笑顔がほんとうにうれしそうなんです。それがさらに水球へのやる気につながればと思っています」。

こうした週1回の練習のほか、土浦水球クラブとの合同練習、茨城県ジュニア大会や茨城県選手権大会への合同チームでの参加を通して団員に水球の魅力を伝えている吉原氏。団のテーマとしては「明る



ゲームやシュート練習など子どもたちが熱中できるメニューで水球を好きになつてもらふことを第一に考えている

週1回の練習が楽しみ! 休まず参加

水球は、7名で構成された2チームがプール内に作られたゴールにボールを入れ合い点数を競う競技で「水中のハンドボール」や「水中の格闘技」とも言われている。1974年から94年にかけて日本体育大学水球部が376連勝したことが有名だ(チームの連勝記録「無敗記録歴代1位」)。巻き足という技術を使って常に体を浮かせておく必要があるに厳しいスポーツだが、水戸水球クラブでは「テーマは楽しく水球をすること。楽しんでる



ゲームやシュート練習など子どもたちが熱中できるメニューで水球を好きになつてもらふことを第一に考えている



く元気で挨拶できる子を育てる、強さのなかにも優しさを持ち自立できる子どもに育てるといふものがありますが、小中学生のうちから水球の楽しさを味わって、大学まで続けてもらえればと思っています。また水球は生涯スポーツでもあるので、社会人になつたときに指導者として後進を育ててくれたり、水泳協会のお手伝いをしてくれるようなれば最高です。そうした循環を作りたいと思います」と、これからも団の指導者として子どもたちの成長を見守り続ける。



しばら 輝さん 中学1年生

「5歳から水泳をやっていて得意なのはクロール。水球は経験者のおじいちゃんに誘われて小6のときにはじめました。泳ぐこと、ボールを投げるのが水球の魅力だと思いますが、今いちばん楽しいのはドリブルシュートをするです。以前はボールを投げるのが苦手でしたが、練習してどんどんうまくなつていっているので、もっと上達したいと思っています」



のぶあ 延 翔愛さん 中学1年生

「水泳をはじめたのは小2のとき。クロールが得意でした。水球は親戚がコーチと知り合いだったのをはじめました。最初は想像以上に激しいスポーツだと思いましたが、仲間と一緒にプレーするのが楽しいです。もし自分がリーダーになったらみんなを引っ張っていけるようになりたいです。技術ではシュートのコントロールをよくしたいと思っています」



すずきから 鈴木 哲良さん 小学4年生

「水泳は1歳半のときからやっていて、小1のときにラグビーフットボール、小2のときに水球を始めました。今はラグビーフットボールも水球も続けていて、中学を卒業するまではどちらも続けて、高校生になったらどちらかに専念したいと思っています。水球は巻き足で沈まないよう頑張ったり、水の中がボールを投げたりするのが楽しいです」